



TITLE:

俳句

AUTHOR(S):

菅原, 天民

---

CITATION:

菅原, 天民. 俳句. 天界 1939, 19(221): 326-326

ISSUE DATE:

1939-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167868>

RIGHT:

任命を受けた。

終りに、臺長は附言して、グリニチ天文臺は觀測上のコンディションが益々悪くなつて來つゝあることを訴へた。夜空が明るいため、長時間露出の天體寫眞は不可能となり、烟のため從來の研究を續行するにも差支へ、星像も悪くなつて來た。尙ほ其の上、アルミニウム面が著しく荒れ、新子午儀の軸やYも瑕が目立つて來た、遂にはグリニチの總ての望遠鏡の對物レンズは粗面となつて了つた、……といふ有様であつて、“若し、グリニチ天文臺が過去264年間輝やかな功績を擧げた如く、今後も續いて天文學進歩のため重要な貢獻をなし正確なる標準時を維持せんとするためには、是非とも觀測上のコンディションの良好な土地へ移轉すべきである。今のやうにコンディションの悪い所で觀測を勵むことは結局勞力の空費であり、プログラムは一部に局限せられることは止むを得ない”云々と臺長は述べてゐる。

又、アビンジャ地磁氣觀測所では、上記の如く、人爲的の妨害が多くて、最悪の場合には觀測は殆んど無價值となる。故に、之れも亦他へ移轉が必要である。イングランドの南部で此うした場所を捜さうとすると、Devonshireの一部以外には無い。

因みに、佛國パリの國立天文臺も、市街の烟霧や光線を避けて、移轉が計られてあることは、かつて本誌にも記した。近代都市の發展は、天文臺にはにが手であること、世界共通の問題と言ふべきである。

## 俳句

愛の波コスモス繁り星の飛ぶ  
 ちりの世を下界に眺め北極星  
 大熊と小熊燦たり七夕祭

岩手 菅原天良